

旅行という単語の持つ感じは色々ある。けれども、皆が感じる感情はときめきだろう。私は一時、家を出るのも一つの旅行であると感じたくて、家の前の駅でお土産を買って来たことも何度もあった。京都に住んでいたが、私たち家族が一番多く食べたお土産は京都お土産ではないかと思われる。

AAC入賞者は美術旅行と言う美術素養を積むための自分だけの旅の時間を持つ義務が与えられる。私はこういう企画ってとても良い趣旨であると思っている。時間と資金が余裕がある時、自分のために何かをやって、何かを残しておくことはかなり大事なのを知っているためである。

私は家族がいたため、一人での旅行よりは家族旅行を計画していた。いくら幼い5歳の子供だとしても、彼なりのスケジュールがあったからだ。しかし期待していた旅行は、2019年冬に始まったコロナという大きな試練で、どこかに行くことも、どこから来ることもできない状況が数年間続いた。初めてのパンデミックは本当に恐ろしく、旅行という単語を口から出すこともできない状況になってしまった。

2022年母国に帰国した。けれども、私にはまだ入賞者に対する義務が残っており、幸いコロナに対する制裁も大分弱まったため、新しい旅行を企画できる希望ができた。まだ海外に自由に出られる段階ではなかったため、国内に限られた旅行だったが、作品に役立つ感受性を引き出すことができれば、悪くはないと思っていた。

旅は東、西、南の方に私の足跡を残し、そこの趣と感受性を感じることで計画した。そのため、華やかな旅よりは、何か素朴な旅行になった。北にも行ってみたかったが、北朝鮮に行く方法は今の私にはなかったため、北は見送るしかなかった。

## 南への旅

幸い、南への旅行を計画していた時、統營(トンヨン)トリエンナーレという国際美術展が開催されていた。国際展示が開かれているという点もとても興味があったが、南の海が見られるというとても楽しみだった。韓国は日本より相対的に短い国土であるが、それでも南端まで行くには一日中走らなければならない距離なので、朝早く出発しても、到着した時は日没が進行する直前であった。実は、サービスエリアの食べ物が美味しかったのも遅く到着した言い訳の一つである。



宿に荷物を下ろして、まだ日が暮れていないので急いで「ダルマル」という公園に移動した。「月を見る公園」という意味だが、日没がより有名な場所らしい。



一日中運転した後に感じる休息はとても甘い。そして明日の日程に関する期待と家ではなく他の地域で迎える夜の妙な異質感はビールの味をさらに美味しくしてくれる。



トリエンナーレ展示場は 統營(トンヨン)全域にわたって地域展示のように行われたが、メイン展示は過去に工場として使われた空間を展示場として活用していた。



展示場の前に作っておいた施設物は私も遊びたいぐらい子供又は皆に大人気だった。







統營(トンヨン)は螺鈿漆器で有名な地域である。地理的特徴が螺鈿漆器の成長を助け、立派な作品と多くの巨匠を輩出した。ここは 螺鈿漆器巨匠キムソンス先生の美術館である。



作品のスケールがまず大きい。漆の作品は過程の特性上、大きな作品を作るのはかなり難しい。しかし、大きな作品であるにもかかわらず、相当な完成度を持っていることを見れば驚かすにはられない。

そして螺鈿を使っただけに作品が派手すぎる。螺鈿は軟弱な材料なので扱いにくいですが、よく使えば海の色をそのまま表出するほど魅惑的な材料だ。長男がパパもそのように作ることができるかと聞かれたが、子供たちに嘘をつく父親は教育上良くないため、そのように作ることにはできないが、努力はしていると話した。



ここは韓国的な色面抽象の大家、チョン・ヒョクリム先生博物館である。色彩の魔術師、海の画家とも呼ばれただけに、華やかな色味を誇る絵が印象的だったが、残念ながら室内は撮影不可だった。建物の外観が独特である。



統營(トンヨン)には壁画が有名なドンピランというところがある。町の壁に絵が描かれており、まるで漫画に出てくる村のようだ。ここでは毎晩壁画ショーが行われる。登山コースに沿って壁画キャラクターが登場する子供たちが好きなコースのようだ。

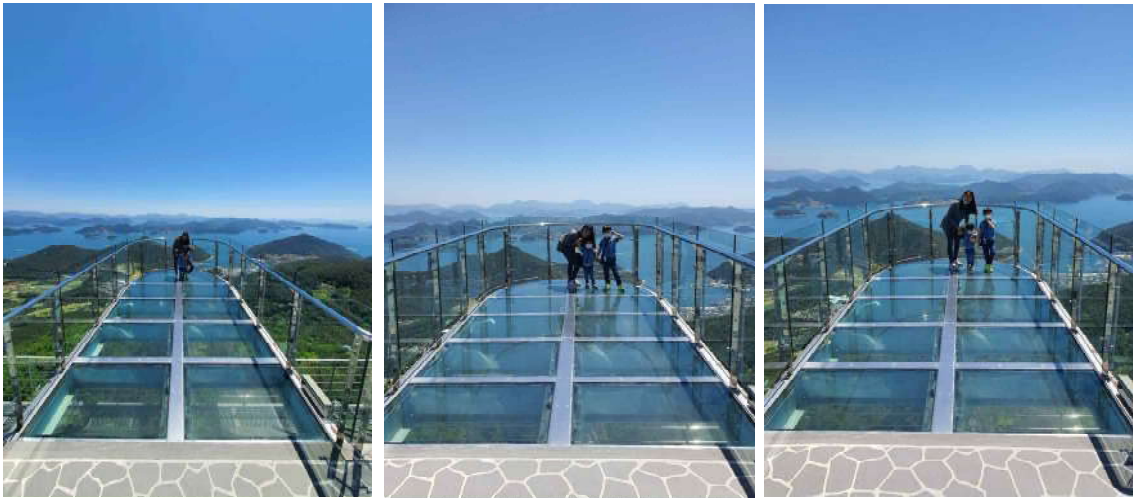




壁画公演が終わった後の様子。とても遅い時間だったが、子供たちは全く疲れていないようだ。出口であの大きいぬいぐるみを売っていたが、手の大きさよりも小さいぬいぐるみを3000円も払って買わなければならなかった。



ケーブルカーに乗りに来た。統營(トンヨン)に来たら、おすすめの場所なので一度乗ってみたが、思ったよりとても怖い。天気がとても良くて遠く海まで全部見える。できれば静かに海を見たかったが、子供たちがケーブルカーを振ってくれてとても嫌だった。



あのガラス床の下が崖である。私は幸い写真を撮らなければならなかったもので、ガラス板の上に上がらなくてもよかった。しかし、後ろに広がる海の風景はあまりにも美しい。



最後の日程を惜しむ後ろ姿。みんな遠いところまで来て大変だったが、心的には豊かになった時間だった。日程の間ずっと大変な顔がたまに見えたが、皆楽しかったし、海を見ながら多くの話もできた。3歳の次男との会話が最も難解だった。



## 西への旅、ヘイリー 村

西への日程はヘイリー村を皮切りに 臨津閣(イムジンかく)平和公園へのコースに決めた。ヘイリ村は京畿道の一番西にあり、芸術家たちが居住する文化空間である。小さな工房が集まっており、毎週公演と手作り市場が開かれる。村が可愛らしいので想像力を刺激する力がある。



可愛らしい手作り市場が開かれている。工芸作家たちが一つ一つ丁寧に作ったため、オンラインショップではなかなか見れない何か特別さがある。一つ買いたい気持ちで迷いますが、すでにお金を払っているというのが現実である。



ここのお住まいは木のような。人が入れる空間がない。ところでカフェだ。テラスの上には大きなやかんがティータイムを準備している。一杯飲めますか。

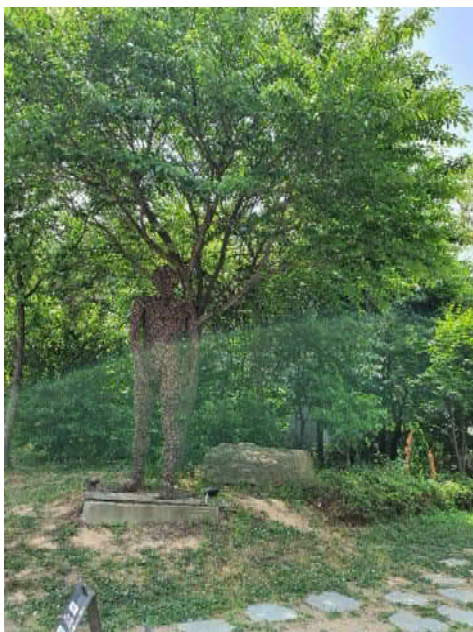




この公園は明らかに車が好きな人が設計した公園に違いない。



非常に非効率的な空間の活用のような建物だが、ここでは許される。面白い建物だ。まるで夜になるときちんと整列するような感じだ。



陰の下で休んでいるが、誰かに見られる気持ちで安らかに休むことができない。





ここはとても面白い空間だが、入場料を払わないといけないので博物館のようだ。外に陳列された品物を見れば、時代劇で見られる私の父親時代の品物がたくさんある。とてもアナログ的で、情感のある物がたくさんある。一度はその時代に暮らしてみたい。



どこを見ても目がとても楽しいところだ。

まだコロナの余波で空いている工房も見えたが、

早く以前の名声を取り戻してほしい。

## 西への旅、 臨津閣(イムジンかく)平和公園

ここは以前、北に行く道だったが、戦争によってこれ以上行けない道になった。平和を称える公園が位置しているが、大きな造形物と彫刻作品が南北統一に対する念願を称えている。



巨大な押しピンがある位置を示している。ここです。ここを覚えてくださいという叫び声が聞こえるようだ。遠くからでも見れるように赤い大きな押しピンが丘に位置している。



丘には風車がたくさんあった。 風が吹けば数百個の風車が同時に動く。





前に進む巨大な造形作品がある。地中から出てどこかへ行くような形をしている。どこへ行くのか、誰を待っているのかは分からないが、切ない作品である。



ここの作品は鉄を利用した作品で、その重量感が相当である。そして錆は多くの意味を表出している。ここの作品は美的要素を探求する作品とは大分異なる。

知り合いの作家の中で作品がうまく進まなかったりする時は、ここに来て頭も冷やしてインスピレーションも得て帰ると言った。広い野原と造形作品、そして分断の最終点という地理的位置はインスピレーションを受ける良い場所かもしれない。

## 東への旅、東草(ソッチョウ)沓溜(ムルチ)港

最後の場所は東端への旅だ。江原道東草に位置するムルチ港は小さな漁村である。私は幼い頃、海辺で幼年時代を過ごしたため、海に対する懐かしさが続いている。日本にいた時、京都に住んでいたが、海に行くにはしばらく行かなければならず、琵琶湖でその物足りなさを癒した記憶がある。

ムルチ港は観光地として有名ではない。それで観光地のような華やかさはないが、漁村の姿がそのまま残っているようで情感のあるところだ。



海はいつ見ても人をときめかせる。



肌寒い天気だったが、子供たちには何の障害物にもならない。

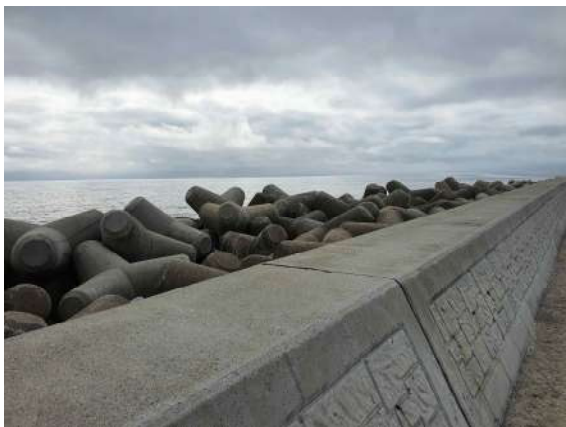


民宿から見える海。

この道がとても気に入った道だ。商店街を過ぎて路地を抜けると出てくる道だが、波の音が聞こえて海がすぐ見えるためだ。



早朝の港の姿である。早朝と言ったのに、すでに港の朝の日課が終わった後だった。人通りの少ない港の姿は波さえ静的だ。



船が入る街角に灯台がある。夜は船の信号機の役割だが、夜が明ければ灯台はその時になってようやく仕事を休むことができる。

幼少時代に海辺で暮らしたが、実際に灯台が仕事をする姿を見たことはない。昨夜ちょっと出てくればよかったなと後悔している。

普通、灯台に行く道には釣り人がいつもいた記憶があるが、まだ早いか全く見えない。





灯台から見える港の全景、船が朝の日課を終えて休んでいる姿である。



灯台に着いたとき、二人の釣り人が静かに釣りをしていた。遠くから見ても近くから見ても一枚の絵のような風景だった。黒い彼らの服は朝の海とは対照的のイメージで感じられた。



一羽のカモメを撮っていた。カモメが私を見て、港を一周大きく回って写真がよく撮れるところに飛んで来る。そして私の前のフェンスに座って45度の角度で体をひねって頭は反対側を注視する。図鑑でしか見られなかったポーズだ。早朝、港でプロに出会った。



港にある海産物屋に入ってきた。朝入ってきた新鮮な海産物でいっぱいだ。新鮮な香りが代わりに言ってくれる。



新鮮なホヤが見える。海産物が好きではないが、あまりにも新鮮なのでおいしそうだ。



また外に出て港の姿を映してみた。晴れたらいいなという残念さがあるが、むしろ晴れたら写真を撮るのが負担である。

私は漆の作品をやっていて、色をたくさん使うが、その中でも青をよく使う。無意識に海を表現しているのかもしれない。

## 旅の終わりに

美術旅行というにはあまりにも長い旅と美術作品が多く登場せず、旅行を計画する最初は果たしてこの旅行が私にインスピレーションを与えることができるのかと心配していた。

しかし、今まで私が作品を進めた方式を振り返ってみると、もしかしたら美術作品が並んでいる街を歩くよりは、地域を旅する方がむしろ役に立った。

長い旅の中で家族と多くの話を交わした。それは家での会話とは全く違う世界のテーマだった。私は子供たちから自由奔放なインスピレーションを受けて、それを私のやり方で整理しながら、一つのアイデアになっていくのを感じることができた。

美術作品に直接接することも作品製作に大いに役立つだろうが、今回の旅行をきっかけに旅行を通じてインスピレーションを得る方式も必ず伴わなければならないということをもう一度感じた。

旅行で得たものが直ちに作品に反映されることを期待するのは難しいだろうが、美術素養を広げる背景になるだろう。近いうちにこういう小さな旅行をもっと計画中である。旅行はとても楽しい。